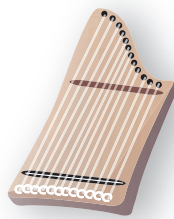


連載 ヘルマンハープ物語 第2章

日本ヘルマンハープ協会 会長・ヘルマンハープ奏者

梶原千沙都^{ちさと}さん(54)

ウィーンで学んだ福祉の考え方が大きな自信に

障害者と健常者が共に奏でられる「ヘルマンハープ」を日本に普及したい。2003年の暮れにドイツの小さな町の教会でヘルマンハープの演奏を聴いた梶原千沙都さん(54)は、開発者のヘルマン・フェーさんに思いを告げた。

だが、フェーさんは、「世界的に広めつつもりはない」と、消極的だった。ダウン症の息子のために開発したヘルマンハープは、バリアフリーの楽器としてドイツを中心に口コミで少しずつ広がっていた。人口250人ほどの村で農場を営みながら、ハープを手作りしていたフェーさんには、はるか遠い日本で販売することは想像もできなかったのだ。

音楽療法を学びに障害者施設へ

助け舟を出したのは、フェーさんの娘のクラウスさんだった。「ヘルマンハープに興味があるなら、ウィーンの知的障害者施設でどのように教えているのか勉強してはどうか」と、施設で音楽療法士をしているトラウデ・ワグナーさんを紹介してくれたのだ。

夫が日本に帰任した後も、子どもがアメリカンスクールを卒業するまでの半年間、ウィーンに残ることにしていた梶原さんは、早速2004年の年明けから施設に研修生として通い始めた。

「障害のある人にはどういう特性があるのか、どんな風に接すれば良いかがわからなければ、ヘルマンハープに取り組めなと思ったんです」



ヘルマンハープの工房(2003年当時)
右からヘルマン・フェーさん、息子のアンドレアスさん、梶原さん、娘のクラウスさん



ヘルマンハープを奏でる梶原千沙都さんとチター奏者のウィリ・フーバーさん (撮影 モリツ・マルチュケ)
Photo by Moritz MARUTSCHKE

自立した存在として障害者と関わる

ウィーンの知的障害者施設はセラピーと作業所が一体となり、まるで一つのコミュニティのようだった。通所者は作業能力に応じて10のグループに分かれ、パン焼きや掃除などの仕事をしながら、自分が好きなセラピーや余暇活動のセッションを受けることができる。音楽セラピーだけでもリトミックを中心にヘルマンハープ、打楽器、ダンスなど多彩なセッションが用意されていた。

「オーストリアの福祉はパーソナルケア中心なので、それぞれが違って良い。自由度が高いほど個人の内面が表れやすいと思いました。個性が尊重されているので、障害があってもみんな積極的に堂々としていました」。その頃、子どもが手術をして不安な気持ちで過ごしていた。そんな時「大丈夫?」とよく声をかけて労わってくれたという。「お互いを思いやり、笑顔で声をかけあう。施設の

中は光があふれているようでした」

梶原さんは週3日施設に通い、ワグナーさんのもとで音楽セラピーを学んだ。例えば、ヘルマンハープの弦に指を導く時は、上から持たないで下からそっと支える。

「そうすると自分がやっているという意識を持てます。自立した存在として障害者に接し、『その人』を助けるのではなく、『その人がやりたいこと』を助けるという考え方が貫かれていました」

神様が創りたかったのはどっち?

梶原さんには、忘れられない出来事がある。施設での研修初日のことだった。

「ウィーンは盗難が多いのでいつも気をつけていたのですが、セッションが始まったのでバッグをその場に放って教室に急ぎました。あとでバッグのことを思い出して、ハッとして気がついたんです。この施設には誰もバッグを盗む人はいな

いことに…」

健常者はいろんな能力を与えられている一方で、悪意を持ったり盗みも働く。施設の人たちはその能力を与えられていないので純真で悪意を持たない。神様が本当に創りたかったのはどちらの世界だろうと、梶原さんは思った。

「だからこそ私たち健常者は慈愛を持って障害のある人と共に生きなさいという神様からのメッセージなのかもしれない」。梶原さんの中にヘルマンハープの軸となる考え方ができあがっていった。

研修が終わった後、ワグナーさんは、「施設のみんなはチサトのことが大好きでした」と、フェーさんに伝えたという。

「その言葉を聞いて本当にうれしかった。フェーさんたちは私のことを見極めようと思っていたのかもしれませんが」

(続く)

(文 赤坂 志乃)

Text by Shino AKASAKA

日本ヘルマンハープ振興会

検索

コラム

子どもの背中② Text by Mariko KATO (アナウンサー)

鈴虫が鳴きだした。ダウン症のある息子は、「ママ、玉ねぎは?チューリップの。庭、スコップで〜」とパントマイム付きで教えてくれた。翻訳すると「秋になったから、庭にチューリップの球根を植えたい」。確かに球根は玉ねぎの形に似ている。

「チューリップの球根、買いに行こうね」「ヤッター!」。大きな伸びやかな声、満面の笑み、まるで、恵比寿さんみたいだ。この子は、こんな小さな願いが通じただけで、嬉しいのだ。

これぞ、子どもがいる至福のひとつである。

息子は、二次障害で、家から一歩出ると全く声すら出せない場面緘黙症だが、家族でのんびり過ごしている時は、持てる力を精一杯使って自らの思いを語ってくれる。吃音もある。内科の主治医は「場面緘黙と言うより、もともと知的障害だからね」と言う。

成長期の知的発達にも影響する甲状腺機能低下症の合併があり、薬を服用中だ。それでも効果がないのは<重度

だから>と指摘されたようで悔しい。

どうしようもない焦りを感じている時、1人のダウン症のある青年に出会った。彼は、30歳を過ぎてから多機能型事業所の製菓班で働いている。親御さんの希望で最初は施設入所だったが、グループホームでの生活もできるようになった。障害支援区分6の最重度。

しかし基本的な身辺自立はできるようになり、言葉の表出は少ないが、大人しく、他人に危害を与えない。何より、本人が笑顔で仕事に取り組んでいる姿

を見て感動した。

ダウン症のある人は早く退行するなんて偏見だ。力を引き出したのは、非言語コミュニケーションで『本人の意思決定支援』ができる心ある人材、支援スタッフたちだ。障害者権利条約の批准国日本の未来を見た。変えるべき環境は、人の心の中にある。諦めず前進あるのみだ。



加藤万里子さん



映画「マレフィセント」のPRで来日したマレフィセント役のアンジェリーナ・ジョリーさん（中央）。日本語吹き替え版で、声優としてオーロラ姫役を務めた上戸彩さん（左端）。オーロラ姫役のエル・ファニングさん（右端）
＝6月24日、東京・六本木のグランドハイアット東京

Angelina Jolie 米国ロサンゼルス出身、女優、映画プロデューサー、ファッションモデル。1999年に「17歳のカルテ」でアカデミー助演女優賞を受賞。2001年にUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）親善大使、2012年にUNHCR特使。世界中で人道支援を続けている。

輝く「福祉」へ今、目覚める時が来た

だれの心にも眠るオーロラ姫

君はなにかね、ときいてみると、驚いたことにその異胎は、声を発した。「輝く日本の福祉だ」というのである。そして、目標とするのは、「まぜこぜの社会だ」と、明晰にいうのである…。

「福祉」を考えるにあたって、司馬遼太郎さんの「この国のかたち」の一節を真似て書いてみた。

いろんな人が今、「福祉」に代わる言葉を探している。「福祉」と表現したとたんに、何か特別なものになり、仕切られた気分さえなる。従来の「福祉」には、そんな語感が備わってしまった面がある、と思っているからだ。

そんな中、女優の東ちづるさんと出会った。自らが理事長を務める一般社団法人「Get in touch」の旗印は、きわめてわかりやすい。いわく、「まぜこぜの社会」。めざすべき道を、絶妙に言い当てた言葉ではないか。



さらに「福祉」を考えたい。今夏に封切りされた映画「マレフィセント」。1959年公開のディズニーの長編アニメ「眠れる森の美女」の実写版だ。

アニメでのマレフィセントは、オーロラ姫に呪いをかける魔女だが、映画では、人間に恋をしてしまう、深く悲しい過去を持った妖精として登場する。

主役のマレフィセント役は、アンジェリーナ・ジョリーさん（39）。詳しいストーリーは、銀幕に譲る。

ここでは、復讐の虜になっている、と思われていたマレフィセントが、「真実の愛」に目覚めていったストーリーに注目する。目覚めさせたのは、なんと呪いをかけられたオーロラ姫その人だった。

眠りにつく前に、無邪気な愛くるしさと、悪い妖精の心に眠っていた「真実の愛」を目覚めさせていった。

それだけではない。だれのキスで目覚めるのか、ここでは触れないが、救われたオーロラ姫は女王となり、人間と妖精の世界の垣根を取り払う。違っていても同じ、同じでも違う…違いを違いと認め合い、ありのままを尊重する「まぜこぜの王国」を創ったのだ。

さて、現実の世界はどうか。

福祉の現場は、凛とした厳しさの中で輝いている。高齢者も障害者も保育園の子どもたちも、支援スタッフらといっしょに一瞬一瞬を生きている。いろんな思いを持ちながら、歩んでいる。

だが、その等身大の姿は「壁」によって伝わってこない。社会に浸透しない。「壁」の一つは、私たちの意識にあるのではないか。ポイントは、心のありようだ。老いや障害を、哀れみの対象としてみていないか。慮るあまり、その人の可能性を奪ってはいないか。

マレフィセントの心にも「真実の愛」が眠っていたように、その化身である「眠れる森の美女」は、実はだれの心にもまどろんでいる。

「壁」をやぶってそのオーロラ姫を揺り起こすのは、まさに『君のタッチ』（20面）だろう。ナミねえの心意気（5面）だろう。

美女が目覚めれば、きっと、社会は輝く。みずみずしくなる。福祉が、特別なものでなくなる。そんな「この国のかたち」でありたい。

